

四十数年立ちました今日、何の不足ない生活、本当に戦死した人々への感謝で一ぱいであります。

炎の中に消え去った物 すべてが愛しい

藤井寺東支部 F・I



を免れていたようです。

私は三月に清水谷高等学校（現清水谷高校）を卒業して、大阪樟蔭女子専門学校の国語科に入学することになりました。しかし空襲を受けたため、ただの一日も通学することなく、幻の学校に終りました。樟蔭の校章と清水谷の卒業証書だけは肌身離さず持ち続け、今も古い箱の中に眠っています。私の青春の唯一の形見です。

昭和二十年六月の大坂大空襲で、私達一家は家や家財道具一切を失ってしまいました。両親を始め家族全員無事だったのですから、不平をいっては肉親をなくされた方々に申し訳ないのですが…。生まれ育った家には、飯台の傷ひとつにしても家族の思いが染みついでいますし、当時は十六歳、戦時中の制約の多い、いや多いが故に密かに書き綴つたノートには多感な少女の思いがこめられています。あの炎の中に燃え上がつていった全てのものが愛しいのです。

当時私達は大阪市福島区の阪大病院の北で、京富（支店）という屋号で和菓子を商っていました。家族は両親、私が長女で妹、弟、そして半年前に生まれたばかりの妹の六人でした。父は足が少し不自由だったので、兵役

学校に軍人がくるようになり（中尉か少佐か）、女子もお国のために労働せよという命令で、女子挺身隊として枚方市御殿山にある天川工場で、鉛筆を工具に持ち変える日々がはじまつたわけです。どうやら飛行機の部品を作っているらしく、私は一日中細い金属片をヤスリで磨いていました。天井の高い広い部屋は空気が濁り、昼でも薄暗く裸電球が幾つもぼんやり灯っていました。こんな状況で本当に日本は勝つんだろうか？ 消しても消しても湧き上がつてくるそんな疑問を、非国民という言葉の恐ろしさに、親友にさえ問い合わせることもできず、自問自答を繰り返し



ていました。お昼の給食は丼に入った大豆力スごはんでした。

そしてあれは二十年の何月頃だったでしょうか、我が家が強制疎開の対象となり、旦那寺である正念寺さんに家族六人が持てるだけの家財道具をもってお世話になることになりました。正念寺さんは環状線の福島駅の南側で、近所に梅田通運があったと想ります。リヤカーに積んだ荷物の中には店で使っていた銅（あか）の大金がありました。父がいつもピカピカに磨き、貯を炊いていた大釜です。根っからの饅頭職人である父にとって、死んでも手放せない品であったのでしょうか。

六月のその日、昼頃警戒警報が鳴り響き、焼夷弾が文字通り雨霰と降つてきました。北の方角に火の手があがつたのが見えたので、本堂脇にあった防空壕から飛び出しました。走りながら後を見ると本堂が燃えていました、一瞬の差で助かったのです。「阪大の地下へ走れ！」誰かの声に焼夷弾の雨のなかを、父は末の妹を抱いて、私は病弱な母を支えて無我夢中で走り続けました。阪大病院の地下は広くってたくさん的人が逃げ込みました。荷物のひとつも持ち出せなかつた私達は体を寄せあって、真っ暗ななかで解除になる迄いつとしていました。「助かった！」と一息入れた時、何ともいえないやな匂いがしてきましたので、隅の方をすかしてみると長細い箱があつて、腕や足が突き出しているのです。先の

空襲の犠牲者なのでしょうか。外へ出たら夕方になつていきました。いく所もなくなつた私達は、家の向かいの、強制疎開を免れたお宅で一晩お世話になりました。長いお付き合いのあつたお宅とはいえ、焼け出された私達を暖かく迎えてくださり、その上に豌豆ごはんをご馳走してくださつたのです。白いごはんと青い豆の鮮やかさが今もはっきり覚えています。そのおいしかつたことも。

翌日関西線で父の郷里の和歌山県へ向かい、そこで二三年に上阪するまで暮らしました。

天命全うできな かつた友らよ

向ヶ丘支部 峰登代子



私は呉軍港の有つた当地清水通りに父と二人で住んで居りました。戦争も毎日激しさを増し、呉もB29の爆音と共に敵機襲来のサ



イレンが鳴り渡る日々が多くなりました。

横穴式防空壕を近くの山に掘るべく、隣組の方々と共に作業をして居りました。完成間近になると、警報発令と同時に、一目散に皆様と共に壕に駆け込み、昼夜を問はず壕生活が続きました。

そして奥大空襲は夜でした。B29の飛来と共に油が撒かれましたので、今夜は雨だと話合って居りました。焼夷弾一発投下。忽ち二十発位の火花となつて火の海です。私の友達



の家に直撃。あつと云う間に家族五人が焼死されました。又私の叔母も防空壕にて窒息死。今朝の元気な御姿の変わり様にただ呆然として居りました。

私にとつて忘れる事の出来ない八月六日の朝、広島に原爆の落った時、警報解除となりましたので、お米の配給所に着いた途端、広島の上空にピカッと光つて白い大きなきの雲がムクムクと舞上り、轟音のすさまじさに、配給所の机の下に避難しました。そして扇風機、被爆された方々が次々と帰つて来られました。眼は焼け、頭手足、皮膚は焼けただれ、余りの悲惨さに直視出来ませんでした。

又広島の叔父と娘さんも被爆されて亡くなられました。

私の娘時代は、戦争のために天命を全うする事無く、故人と成られた友人知人がねられました。御冥福を心より御祈り申し上げます。

「醜いものは
着物の長い袖」



大連支部 T・M

昭和二十年八月十四日といえは終戦前日で

す。その日、私は姉の二度目の出産を手伝う

ため、難波から南海電鉄で、泉南の吉見の里へ向かう途中、天下茶屋で空襲を受けたのです。慌てて電車から飛び降り、建物の陰に身を伏せました。その電車を目標に、B29が機銃掃射をしかけてくるのです。操縦するアメリカ兵の頭がはっきり見えました。死ぬかもしれない、という恐怖の何分間でした。B29が飛び去るとまもなく電車が動きだし、無事

姉の家にたどり着くことができました。姉も元気で待っていてくれ、十六日、無事に女の子が産まれました。

私は大正十年生まれで、昭和十四年に学校を卒業してすぐ銀行に入ったのですが、その頃のこと覚えていて、(大学卒の男性で五十円)三十分だったこと(大学卒の男性で五十円)すぐバーマ・ネットをかけたこと。前髪はくるくるとしたカール、あとは内巻きというスタイルで、うしろに大きなリボンを結ぶのです。そのリボンが嬉しくて、幾つも持つて毎日取り替えていました。

そういう娘らしいおしゃれも徐々に許されなくなり、いつの頃からだつたか、モンベ姿一色になつていきました。和服をつぶして作るのですが、ふだん着は木綿の紬で、外出用には高麗織りで上下を作りました。

昭和十八年、愛国婦人会・国防婦人会・連